

## 強迫症・強迫性障害の診断

テーマ

### 診断・検査

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学講座主任教授

強迫症（OCD）は、強迫観念・行為などの強迫症状により、著しい苦痛や支障を呈するものである。従来OCDは不安障害の一型であったが、DSM-5では、「とらわれ」あるいは「繰り返し行為」を特徴とする「強迫症および関連症群」に分類された。診断基準にも、洞察に関する項目の削除や「チック関連」特定項目の追加などがなされ、この信頼性や有用性については今後の検証を要する。

Key Word

■ obsessive-compulsive disorder (OCD) ■ anxiety disorders ■ DSM-5  
■ obsessive-compulsive and related disorders

### 1 強迫症（OCD）の診断および鑑別診断

強迫症（obsessive-compulsive disorder；OCD）は、一般人口中の生涯有病率は1～2%程度、男女比はほぼ同等で、平均発症年齢は20歳前後とされている。男性がより早発の傾向であり、女性では結婚や出産に関わる時期の発症が比較的多い。これはDSM-IV-TRまで、不安障害の一型とされてきた。しかし2013年に改訂されたDSM-5<sup>1)</sup>では、不安障害の範疇に変更が加えられ、OCDはパニック症や社交不安症などを含む不安症群カテゴリーから分離された。そして「とらわれ」、あるいは「繰り返し行為」を共有する「強迫症および関連症群（obsessive-compulsive and related disorders；OCRD）」という新たなカテゴリーの中核に位置付けられている。

OCDの診断では、まず強迫観念、あるいは強迫行為といった強迫症状の存在が必須である<sup>1)</sup>。このなかの強迫観念は、繰り返される持続的な思考、衝動、またはイメージで、それは経過中のある時期において、侵入的で

不適切なものと体験され、多くの場合、強い不安や苦痛を伴い、これを無視したり、抑制しようとしたり、あるいは他の思考や強迫行為などの行動によって中和が試みられるものである<sup>1)</sup>。一方の強迫行為とは、強迫観念に対応して、あるいは厳密に適用しなければならないルールに従って、駆り立てられるように行う繰り返しの行為（例：手を洗う、確認する）または心の中の行為（例：祈る、数える、呪文を唱える）のことをいう<sup>1)</sup>。これらは不安や苦痛を避けるか、緩和すること、あるいは何か恐ろしい出来事や状況を避けることを目的とし出現するが、現実的な意味でのつながりはもたず、または明らかに過剰なものである。これらが強い苦痛を生じて時間を浪費（1日1時間以上）させ、日常や社会的、職業的機能に著しい障害をきたしている必要がある<sup>1)</sup>。一方、DSM-5におけるOCDの診断基準の最たる変更点は、強迫症状を不合理性で過剰なものとして捉える洞察についての項目が削除されたことであろう。それに代わり、病識の状態を「十分またはおおむね十分」、「不十分」、「欠如、あるいは妄想的な信念を伴う」の3段階で特定する必要がある。しかしながら、